

シンポジウム 「司会の言葉」  
ボーダーレス時代における感染症危機管理

岡部 信彦

国立感染症研究所

感染症をめぐる状況は一頃とは異なり、目の前にいる感染症の患者の診断治療に集中するだけではなく、世界の状況を見ながらその対応を考えなくてはいけなくなっている。その要因として、新た発生している感染症の存在、あるいは古典的な疾患であっても再びあるいは依然として人々に影響を及ぼし続けている感染症の存在、人と物が大量に短時間で移動が可能になり、それに伴って感染症の拡大が以前にもまして速度を増していること、加えて情報の発達はそのニュースを一気に身近な物にしていること、などがあげられる。しかし、その情報の速さと、質、は多くの場合適切なバランスにはなく、まだ見ぬ物あるいは不明な疾患に対する対応の不十分さは、一方では人の不安を引き起こし、社会的、経済的に大きな影響を与える。その典型的な事例が2003年に発生したSARSであり、2004年の鳥インフルエンザの流行であった。ことに我が国においては、幸いにSARSの国内発生例は一例も見ることなくすみ、また鳥インフルエンザも一部農場等での鳥の間での発生は見られたもののヒトでの発生はなく終わったが、まさに「ボーダーレスの感染症の侵入」を実感した。これらの事例は多くの教訓を我々に与えたが、大切なことはこれを次ぎにつなげていくことである。そこで今回のシンポジウムは、それぞれの立場で感染症対策を体験された方々の話を伺い、次ぎにつながる感染症の危機管理について本学会会員の方々との討論を行いたいと考え、計画されたものである。多くの方々のご参加と、熱心な討論をお願いいたします。